

復興・復興支援プロジェクトでは、住民の生計手段の回復などを通じて復興プロセスを促進するクイック・インパクト事業も実施された。その一つに、フィリピンの大衆魚ミルクフィッシュと牡蠣の養殖業の再興事業があるが、ここにも次なる災害への備えがある。

ミルクフィッシュの養殖で新たに導入されたのが、「浮沈式生簀」だ。これは、広島県福山市の漁網メーカーである日東製網株式会社が開発した、自在に海に沈めることができる生簀だ。台風が多い日本でクロマグロの養殖用に開発されたもので、台風が来た際に海の中に沈めて、波の影響を受けにくくすることができる。以前からフィリピン・パラワン島に設置されていたものは、台風ヨランダの猛威の中でも無事だった。福山市が

示した避難計画も作成された。計画づくりには、宮城県東松島市の知見が生かされた。フィリピン側の自治体の防災担当官や計画担当官など復興関係者が過去4回ほど同市を訪れ、集団移転や復興計画づくりのプロセス、防災対策を学んだのだ。

中でも、タクロバン市の防災担当官ブランドン・ベルナダスさんは、東松島市で学んだ避難計画づくり、早期警報システムや備蓄倉庫、救命ボートなどの防災対策を次々に導入していった。タクロバン市は貿易船や大型船も出入りする港湾都市だが、台風ヨランダ被

### 沈む生簀で防災対策 共助体制づくりもカギに

災害の3日間、外部からの支援が全く届かなかったことが背景にある。この経験から、ベルナダスさんは「自力で3日間を生き延びるための備え」を重視しているのだ。国や軍の支援に依存しないよう、災害時における市長や市役所各課の役割を時系列ごとに整理した「タイムラインアクションプラン」も、日本に倣い導入した。

タクロバン市と姉妹都市であるという縁もあり、同社はこの養殖業再興事業に携わることになった。同社函館工場技術部総合網研究課の細川貴志さんは、「資材を日本から取り寄せると割高になってしま

うため、浮沈式生簀の普及ではまず現地ですぐに資材で生産できるように、現地調査と製品開発から始めました」と振り返る。開発においては、資材だけでなく、生簀を沈めるコンプレッサーも専用の日本製ではなく、現地の漁民が使い慣れている漁船エンジンで動くものにするなどの工夫もこらした。

も人気メニューになっているという。JICA国際協力専門員の平林淳利さんは、「生産から加工、販売といったバリューチェーンを地元で構築するプロセスで、住民が互いに支え合う体制が作られます。そうすれば、災害が起きても早い段階で復旧ができるようになります。災害に強い地域づくりには欠かせない要素です」と語る。

東松島市を参考に、避難経路を実際に歩いて障害物などがないか確認するフィリピン被災地の住民たち



台風ヨランダ襲来後の被災地

自力で生き延びる備えを  
東松島の知見を活用

レイテ島とサマール島を含む4島を襲った台風ヨランダの最大瞬間風速は90m(日本気象庁調べ)。その勢力は「過去に類をみない」と形容された。死者・行方不明者は7986人、損壊家屋は約114万棟に上り、日本はすぐに大規模な緊急援助を実施。翌年2月には、タクロバン市を含む被害の大きかった沿岸地域18の自治体を対象に、復興計画の策定や公共施設改修・生計回復支援などを通じた災害に強い地域づくりを目指すJICAの復興・復興支援プロジェクトが開始された。

高潮被害の大きかったタクロバン市とタナワン町、パロ町では、プロジェクトで作成した高潮ハザードマップを踏まえ、海岸線から40m以内の地域の住民移転を含む土地利用計画や避難所・避難経路

## 台風に負けない養殖業を育てる

2013年11月8日、超大型台風ヨランダ(国際名:ハイエン)が、フィリピン中部を襲った。市街には5〜6mの高潮が押し寄せ、壊滅的な被害をもたらした。現在、被災地では災害に強い地域づくりや地場産業である養殖業の再興が進められており、これらの取り組みに東日本大震災の被災地と広島県の漁網メーカーなどが尽力している。



from フィリピン  
Philippines



浮沈式生簀。ロープなどでつなぎとめて、生簀自体を浮かせたり沈めたりする



台風ルピー襲来時の避難所。ヨランダ後に作られた避難計画の下、より適切な避難所運営がなされた



台風ルピーの対策会議。右奥の赤いシャツの男性がオルデス市長(当時)。その左で腕を組む男性がベルナダスさん



東松島市を参考に、避難経路を実際に歩いて障害物などがないか確認するフィリピン被災地の住民たち